



3. ISFMキヤット・フレンドリー・クリニック

キヤット・フレンドリー・クリニックになるには少なくとも以下の3点を満たす必要がある:

- まずはじめに、獣医療チーム全体が猫の立場を尊重し真摯に猫と飼い主に接することが大切である。この”Cattitude”の姿勢は極めて重要なポイントである。また、病院側が飼い主とのコミュニケーションに積極的に取り組むことも重要である。
- 二つ目に、病院スタッフは猫の内科学や外科学だけでなく猫医療に関するあらゆる側面から進歩に対応するため、継続して専門的能力の向上に努めることが求められている。また、臨床転帰を確実にモニタリングするための対策を講じ、必要に応じて改善してゆく必要がある。
- 第三に、病院の設計およびレイアウトが適切であり、尚且つ可能な限り最善の治療を施せるように適切な検査機器や施設、および器具類を備えていることが必要である。

上記の三点はいずれも重要な項目であり、これらを併せ持つことにより、「キヤット・フレンドリー」且つ「より良い猫医療」を提供できる病院となる。

既に多くのキヤット・フレンドリーな取り組みをしている病院であっても、小さな改善により大きな変化をもたらされる可能性がある。この章を通して、より高い水準のキヤット・フレンドリー・クリニックになるために、病院内の見直しに役立てていただけたら幸いである。

創造性をもってぜひ取り組んでいただきたい！
キヤット・フレンドリー・クリニックの基準のいくつかは、小規模な病院にとっては一見困難に思えるかもしれないが、想像力を働かせて病院内のスペースや設備の使い方を工夫すれば、ほとんどの項目は実現可能である。

猫の立場を尊重する - 猫に対する正しい姿勢 ” Cattitude” と対応

猫に対して適切な姿勢で対応するには、様々な要素が含まれている。猫の気持ちをよく理解し、穏やかに、且つ落ち着いて扱う必要がある。猫の扱いは、誰もが簡単にまた自然にできる訳ではないが、習得可能である。まずは猫について正しく理解することが、第一歩となる（「第2章. 患者としての猫」を参照のこと）。猫を理解することに加え、穏やかに接すること、猫の扱いおよび保定に際しては「過ぎたるは及ばざるがごとし」であることを理解すること、また猫を動物病院に連れてくるだけでも大変であることを十分に考慮し、飼い主にも配慮することが、大切である。

猫とその飼い主に対して真摯な姿勢で対応するには、以下のようにスタッフを教育する必要がある。

- 動物病院として猫を歓迎していることを明示すること。
- 前向きな態度で、猫に接する。また臨床面だけでなく、あらゆる面で猫のニーズに対する知識が豊富であること。
- 飼い主の気持ちを理解し、猫を動物病

院に連れて来る際の大変さも理解すること。

- 猫や猫の周囲では、どのように行動すれば良いかを知っていること。
- 病院内での猫の行動を理解し、常にそれを意識しながら臨機応変に対応すること。

うんざりしないでください-
工夫をこらしましょう！規模
の小さな動物病院にとって、
キャット・フレンドリー・
クリニックの基準の中には、気が
遠くなるような項目もあるか
もしれません。これらに気を取
られることなく、限られたス
ペースと設備を用いて工夫する
ことが大切です。多くは実現可
能なものばかりなのです。



- 猫の扱いを知っている。重要なことは、ストレスを増加させることなく、軽減するような方法で猫を扱わなければならない。無理な保定は極力行わないこと。
- 猫およびその飼い主に対して提供する獣医療に、「キャット・フレンドリー」の原則を適用すること。
- 猫のために、可能な限りの予防医療をきちんと推奨すること。

意図的か否に関わらず、猫と飼い主に対して、猫に関心がない素振りや、猫を理解していないという印象を与えるスタッフほど悪いものはないだろう。一方で、病院内にキャット・フレンドリーな姿勢が浸透していれば、飼い主に対して極めて良い印象を与えることができる。

猫のことを理解して接することや、来院した猫のために最善を尽くし、病院の構造、猫の扱い方に関して工夫することで飼い主にキャット・フレンドリーな動物病院であるというメッセージを伝えることができるだろう。

このような姿勢は、獣医療チーム全員に欠かすことができない。診察室での獣医師の対応が重要であることは言うまでもないが、飼い主が来院して最初に接するのは、通常、動物看護師やテクニシャン、または受付スタッフであり、彼らの姿勢は非常に重要である。猫は、診察を受けるまで待合室で時間を過ごさなければならず、スタッフ全

員が好ましい姿勢と対応を示すようにすることで、飼い主と猫を安心させ、ストレスを最小限に抑えることができる。従って、すべての動物病院スタッフにとってキャット・フレンドリー精神は欠くことはできない。

様々な猫の品種および性格のタイプに精通し、猫の基本的特性を知ることで飼い主に対して理解していることを示すことができるようになる。また、非常に仲が良く絆の強い飼い主がお互いに強い猫を2匹（例えば、オリエンタルグループ※1またはエイジアングループ※2のように社交性が高い品種の血縁個体同士など）飼っているのであれば、来院後に2匹が同じニオイになるよう一緒に来院してもらうことで、多頭飼育の猫間に関係性の問題が生じるのを防ぐことができる。

猫の飼い主の気持ちかわかるスタッフを置く

私たちは、猫特有のニーズについて十分な知識と理解が必要であるが、加えて猫の飼い主についても十分な理解をすることが重要である。多くの飼い主にとって、動物病院に連れて行く行為事態が精神的に大きな負担となっている。猫を捕まえてペットキャリーに閉じ込め、多くの場合は車に乗せて、慣れた環境やなわばりから離れた場所に連れ出し、病院に連れて来なけれ

ばならないのである。動物病院への通院は、ほとんどの猫にとっても非常にストレスが強く、飼い主にも同様にして精神的苦痛をもたらす（そして、しばしば疲労困憊してしまう）。飼い主にとって、動物病院へ通院することの意味や苦痛を理解し、少しでもマイナスの影響を軽減するためにできることを考えておくべきであろう。

第一印象

多くの場合、飼い主に対して動物病院の第一印象を与えるものは、電話応対をして初診の予約を受け付けたスタッフである。キャット・フレンドリー・クリニックのあるべき姿勢は、猫が動物病院に到着する前から始まっている。この最初の段階で、飼い主を安心させ、また「ストレスの少ない」来院となるように手助けできることは多い。多少時間がかかっても、その後の診察を容易にできるだけ

多くの飼い主にとって、猫を病院に連れて行くという行為そのものが、非常に精神的疲労を伴います。

でなく、再訪を促すための環境および印象を作り出すこともできるため、未来への投資であると言える。

猫を動物病院に連れて来る際の適切な方法についてアドバイス

したり、飼い主が穏やかにリラックスできるよう手助けするこ

猫が病院の入り口から入って来るよりもずっと前から、始まっているのです。

とは、飼い主と猫の両者に対して、非常に好ましい効果をもたらす。来院時、猫は以下のようなストレス要因にさらされる。

- 慣れないキャリーケース。
- 慣れない車での移動。
- 移動中および病院内での慣れないニオイ、景色および音。
- 見知らぬ人や動物、これらはいずれも大きな脅威となり得る。
- 慣れない環境の中で知らない人に触れられ、診察される。
- 検査を受けたり、動物病院に入院したりする可能性がある。

これらは、どの猫にとっても試練となる可能性があるが、病院スタッフが事前に、病院に連れて来る最良の方法、おすすめのキャリーケースのタイプ、および猫を安全に移動させる方法について飼い主にアドバイスすることにより、改善することができる。

- キャリーケースは、丈夫で猫が逃げ出しにくく、尚且つ、猫が出入りしやすく、飼い主と病院スタッフが容易に猫を出し入れできる必要がある。これらの条件をすべて満たし、清掃や消毒が容易であることから、上部が開くプラスチックのキャリーケースが望ましい。このタイプ



のキャリーケースは猫が身を隠せないことがあるが、毛布などで上部を部分的に覆うことで解決できる。

- 家庭内で非常に仲のよい猫同士である場合は、1つのキャリーケースと一緒に入れても良い。しかしそうでない場合は、ストレスによる自己防衛のための攻撃を避けるため、別々のキャリーケースに入れて来る。
- キャリーケースを見ることが強いストレスとなり「動物病院への移動の合図」とならないよう、猫がキャリーケースをなわばり中の「家具の一部」と見なしていることが理想である。可能であれば、猫の睡眠／休息スペース内にキャリーケースを常に置いておくことが望ましいが、難しければ、来院の数日前からキャリーケースに慣らして



猫には身を潜められる環境が重要です。移動の際には猫用キャリーを（猫が使い慣れているタオルまたは毛布などで）覆うと、ストレスを軽減することができます。

おくだけでも効果がある。また家庭内で、キャリーケースの中で食事を与えるようにすると、キャリーケースを嫌がるのが少なくなる。

- キャリーケースは、猫がよく知っているニオイがし、猫にとって安心できるものである必要がある。猫が最も好んでいる人のニオイがする衣類、または猫が眠るときに使用しているマットなどを入れるとより安心できる。また、合成猫フェイシャルフェロモン製剤（フェリウェイ®、ビルバックジャパン株式会社）を入手できる場合は、猫を入れる約30分前にマットやキャリーケースに直接スプレーすることで、猫がリラックスできることがある。

- 猫には、身を隠す場所が必要であり、移動時にキャリーケースに覆いをするすることで（例えば、猫が慣れているタオルや毛布など）、ストレスを軽減することができる。またこの方法は、待合室にいる間および病院内を移動するときにも役に立つ。前面の小さな入り口が開くだけの側面が硬い

キャリーケースよりも、上部が開くキャリーケースを毛布などで覆ってあげる方がはるかに良いだろう。前面しか開かないキャリーケースの場合、猫が身を隠したいときやストレスを感じて、怖がってしまっている場合に、猫を出すことが極めて困難となる。

- 車に乗せるときは、キャリーケースが動かないようにするため、後部座席の足下にしっかり固定するか、または座席の上にシートベルトで固定する。その際にはキャリーケースが斜めに固定されておらず、水平になっていることを確認することも重要である。

- 穏やかな運転を心がけ、大きな音を立てたり音楽をかけたりしないこと。猫は飼い主の不安を非常に敏感に察知するため、平静を保ち静かな口調で話し安心させるようにする。

- マットやシートの予備（キャリーケースの中での排尿や排便に備え）を用意しておくが良い。



- ・ 慎重かつ安全にキャリーケースを扱うこと。例えば、猫が安心して快適で居られるように、病院に入るときなどにキャリーケースを自身の脚にぶつけて揺らさないようにする。キャリーケースは一面だけを残して、全体にカバーを掛けておく。

猫および飼い主が病院に来院したら、まず安心させることが重要である。親しみをこめて挨拶し、待合室から診察までの手順について分かりやすく説明することを忘れてはならない。猫と一緒に車の中で待つことを好む飼い主や、猫を連れずに待合室に犬がいるかどうかを確認しにきたりする飼い主もいる。飼い



主および猫の性格に合わせて、柔軟な対応をすることが重要である。

猫専門従事者

病院内に、病院全体を教育しスタッフ全員の模範となる「猫専門従事者」を置くことは、病院にとっても飼い主にとっても非常に有益である。自信を持って、猫を理解し正しい技術を提供するためである。

猫専門従事者は、猫に関する情報収集、「猫について考える」ための議論やそれを実行する際の中心人物として活動する。猫専門従事者は獣医師である必要はなく、多くの場合、動物看護師またはテクニシャンが、この役割を果たす。

猫に対して、また猫の周囲では、どのように行動すれば良いかを知っているスタッフを置く

猫のケアに直接携わるか否かに関わらず、獣医療チーム全体が、猫に対してどのように行動すればよいかを知っていることが重要であり、以下の点に留意する。

- ・ 猫がニオイに敏感であることを知っておくこと - 通常の手術のニオイのほか、香りの強い香水の使用や消臭剤の過度の使用は猫を不安感をあおる。部屋の換気を行い、消毒剤はメーカーの指示に従って十分に洗い流す。また、可

能な限りニオイの少ない／無香料の消毒剤を使用する。

- 猫が音や目に映るものに敏感であることを知っておくこと - 猫の聴覚は、人や犬に比べてはるかに優れていることを念頭におくこと。病院およびそのスタッフは、猫が音や目に映るものによって不必要な苦痛を感じることをしないよう努めなければならない。
- 来院時には、猫が普段生活している自分のなわばりから離れていることを意識しておくこと - 普段生活している環境から外に連れ出してもすぐ順応できる



猫もいる一方で、猫にとって、知らない場所に連れて来られることで、とても強いストレスを感じる。猫がストレスにさらされていることを十分理解し、適切に対応（例えば、穏やかで、猫のことを考えた接し方や他の動物や猫とできるだけ離すなどの方法がある）。することで、ストレスは大幅に軽減される。

- 入手可能であれば、待合室および診察室内でフェイシャルフェロモンの拡散器／スプレー（フェリウェイ®、ビルバック ジャパン社）を使用しても良い。これにより、猫のストレスは軽減できるものの、猫のことを考えた適切な設備や姿勢に勝るものではない。

猫の扱い方を熟知しているスタッフを置く

猫を適切に扱うことは、極めて重要である。猫は、知らない人や不慣れた環境に対して敏感である。そして猫が発する「ボディランゲージ」を動物病院のスタッフが正しく理解していないこともある。攻撃的行動が恐怖から起こっていたり、ストレスや疼痛と言ったわずかな徴候も見落とされがちである。

猫をうまく扱うことは、診察や処置を無事に行えるかどうかを決定する重要なポイントとなるが、十分に考慮されていないことが多い。これは、キャット・フレンドリー・クリニックにおいて

猫を適切に扱うことは極めて重要です。一般に猫は見慣れない人や状況に敏感であり、彼らの「ボディランゲージ」は誤解を与える可能性があります。

て非常に重要な一面である。動物病院のスタッフ全員が猫の扱い方を身につける必要がある。「猫を扱うことを楽しんでいるか」、「他のスタッフよりも猫の扱いに長けているか」は猫や飼い主にはすぐに分かってしまうだろう。このような天性の才能を生かす一方で、各人が猫の扱いに関するスキルを上達するように努めることが大切である。

猫をうまく扱うには、「過ぎたるは及ばざるがごとし」を意識することが重要である。猫は通常、最低限の保定で効果がある。多くの猫は怯えており、強く保定するのではなく穏やかに保定して安心させることができれば、自己防衛のために攻撃的になることを避けられる。猫掴み（頸部背面の皮膚のゆるい部分を掴んで保定すること）は保定の最終手段としてのみ用い、絶対に首を掴んで猫を持ち上げてはならない。

猫を捕まえ直ちに猫掴みや強く保定した場合、猫は極度に怯え、しばしば自己防衛のための攻撃行動を起こす場合もある。

- 猫に対しては、常に穏やかになだめるように接すること。特に初対面で長時間視線を合わせることは、猫に大きな脅威を与える。
 - 猫の後方を見るようにし、ゆっくりと瞬きする。猫が許容すれば、キャリーやバスケットから猫を持ち上げる前に猫をなでながら話しかけることが理想的である。フェロモンの分泌部位（鼻梁上部および耳介前部）を、手でこするようにする。猫の体に触れる前に、最初に手のニオイをかがせて反応を見る。たいていの場合、猫が頭を手でこすりつけてくる。これは、飼い主にとって非常に好印象である！

- 必要に応じて厚手のタオルなど使用する。（ただしタオルを使用するのは、猫を穏やかに扱うためである）。



- 診察台の上が滑りやすいと大きなストレスになることがあるため、猫が掴まれるようにタオルまたはゴムマットを使用すると良い。診察台に、寝心地のいいベッドを置くと、猫を座らせたり横たわらせたりすることもできる。
- 綿の白衣を着用すること ー 合成素材は静電気を発生する可能性がある。

動物病院内での猫の扱い方

人とのふれあいに多くの猫は順応する。スタッフが猫と遊んだり、なでたり（特に頭部を優しくなでる）、グルーミングをしたりする時間を設けることで入院中の猫のストレスを大幅に軽減できる。しかし、猫によって楽しみはそれぞれ異なるため、個体ごとに対応する必要がある。ひとりであることを好む猫もあり、このような場合にはそっとしておく必要がある。

- 猫は、静かに優しく扱うこと。ただしひとりになりたいときを見極めて、猫はそっとしておく必要がある。
- 猫の聴覚および嗅覚が敏感であることを念頭に置き、猫の視点に立って環境を検討すること。特に、入院中の猫の周辺には一定数以上のスタッフが立ち入らないようにすべきである。
- 猫の福祉のためには一貫性、予測可能性および主導権を握っているという感覚を与えることが重要である。
- 入院室に静かな音楽を流すことで、落ち着かせる効果がある。

採血、血圧測定および麻酔導入などの簡単な処置を行うための静かな場所を設けることが重要である。これらの処置を開始する前に、猫を部屋に慣らしておくこと。また、他の猫がいる場合は、処置を行わないこと。

- 猫をじっと見つめる、強制的な態度をとる、または乱暴に扱う、乱暴になでることは大きなストレスとなり、極めて有害な影響を与えることを、スタッフ全員に理解しておくこと。
- 可能であれば面会に来た飼い主のために別室を提供する。そうすることで他の猫の動揺を避けることができ、飼い猫と落ち着いてふれあう時間を作ることもできる。
- 個々の猫の行動を注意深く観察し、問題がある場合は直ちに周囲の環境などを変更できるようにしておくこと。
- 飼い主が休暇等の理由により病院で猫を預かるだけの場合は、病原体の伝搬を防ぐための厳しい衛生方針に基づき、必ず入院中の猫と完全に分離された専用の「猫預かり施設」で預かること。
- おやつを与えることで治療に支障がなければ、猫が良い反応を示す場合は、病院を嫌がらないようにするためにこれを上手に用いること。

AAFP/ISFMの猫に優しい猫のハンドリングガイドライン（AAFP and ISFM Feline Friendly Handling Guidelines）には、猫の扱い方に関する、より詳細な情報を得るための情報源が示さ

AAFP and ISFM

Feline-Friendly Handling Guidelines



isfm

International Society of Feline Medicine
October 10, May 2011



れている。これらのガイドラインに従って猫を扱うことが勧められる。なお、このガイドラインは、JFMSのウェブサイト (<http://jfms.com>) でも閲覧可能である。

動物病院と飼い主とのコミュニケーション

猫に包括的な獣医療を提供するためには、動物病院と飼い主との良好なコミュニケーションを築くことが極めて重要である。飼い主にも共感してもらえようようにコミュニケーションをとることが大切であり、相談や悩みについて十分に聞く機会を与える必要がある。これは、検査および治療に関することのみでは

なく、飼い主とのコミュニケーションのあらゆる側面にも当てはまる。例えば、予約時には飼い主を安心させ、病院に着いてからなすべきことなどを説明し、必要に応じて、猫を病院に連れて来る方法についてアドバイスしなければならない。また、説明した内容をどの程度理解できたかを確認するため、飼い主に質問する時間を与えることも大切である。

飼い主とのコミュニケーションにおける重要なポイント、およびコミュニケーションを高める方法を以下に示す。

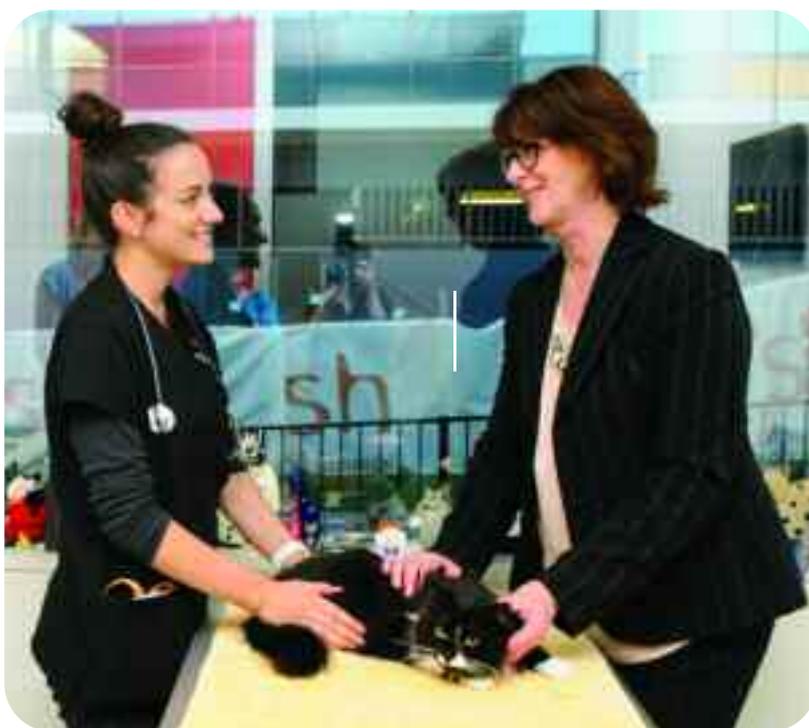
- 来院するすべての飼い主と、直接コミュニケーションをとれるようにすること。郵便、ファックス、電子メール、携帯メールまたは電話によるコミュニケーションが可能であり、病院および飼い主にあわせていずれの方法を用いても良い。定期的な予防医療（ワクチン接種、ノミ予防等）の時期が近づいたことを飼い主に知らせるための連絡は必須であり、病院のニュースレターなどを通して積極的に連絡する機会を設けることが理想的である。また、飼い主によって医学および獣医学に関する知識は大きく異なっていることから、適切な言葉を用いて飼い主に専門用語の意味を説明することも大切である。

- 猫の診療や世話を誰が行っているのかを、飼い主に知らせる必要がある。病院スタッフ全員の役割（例えば、獣医師、動物

看護師、テクニシャン、病棟スタッフ、受付係等)を示した最新リストを、待合室に明示しておくことが推奨される。理想としては、飼い主がスタッフの顔が分かりやすいよう、写真付きの案内板を設置すべきである。また、病院内に猫専門従事者がいる場合は、これを明示すること。

- 検査および治療について飼い主と話し合う場合は、必ず当該症例に適切で、なおかつ実施可能な複数の選択肢があることを率直に話すことが必要である。飼い主に対して妥当な概算費用を提示し、必要があれば(飼い主が要求した場合も含む)文書化して渡さなければならない。検査および治療の費用が当初の見積もりを超える場合は、必ずできるだけ早い時点で飼い主に知らせ、必要に応じて、可能な選択肢についてさらに話し合いをすること。終了した処置の料金を請求する場合は、飼い主の要求に応じて明細を記した請求書を発行すること。

- 動物病院において非常に重要な原則の一つは、1名または複数のスタッフを「猫専門従事者」に指名することである。なお、指名する人物は、必ずしも獣医師である必要はない。動物看護師またはテクニシャンであればより望ましいが、猫およびその飼い主の気持ちが分かり、なおかつ猫の行動および猫の扱い方や接し方をよく理解している人物である必要がある。



スタッフボードで猫専門従事者を確認できるようにしておけば、どのスタッフが猫専門従事者であるかが飼い主にわかり、飼い猫に関して特に心配なことがある場合に相談するきっかけを作ることができる。また、猫専門従事者は、動物病院が確実に「キャット・フレンドリー・クリニックの基準」を満たしていることを保証する責任も負わなければならない。

- 肯定的な意見だけでなく否定的な意見も積極的に飼い主からのフィードバックを求めるべきである。(以下の「いかにキャット・フレンドリーかを調査する」の項を参照のこと)これに加え、飼い主が正式に不服を申し立てる方法また、それに対する病院側の対応の概要を説明したものを文書化しておくべきである。この文書は、飼い主の要求に応じて閲覧できるようにすること。

- 口頭でのやりとりの多くはすぐに忘れられてしまう可能性が高い

ため、診察中に口頭で伝えた情報を補足するため、診療内容に関連する印刷物を提供することが強く推奨される。また、飼い主に向けて「猫の生態」や、「猫の通院」に関する印刷物を作成して待合室や受付で配布し、猫に対する正しい情報を知ってもらうように努めるべきである。キャットフレンドリークリニックのリーフレットには、猫への投薬方法（例えば、錠剤の飲ませ方、目薬のさし方、滴下薬の使用方法等）ならびに動物病院への来院や帰宅時の猫の移動方法に関するアドバイスが記載されている。また、International Cat Careのウェブサイト (<http://www.icatcare.org/>) のような、適切かつ信頼性の高いウェブサイトを紹介することも、飼い主にとって有益であろう。

「時間外」医療の提供

すべての動物病院が、入院中の猫を24時間連続してケアしたり、24時間救急サービスを提供したりできるわけではない。そのため提供できる医療のレベルおよび緊急時の対処方法をあらかじめ飼い主に知らせておく

ことが重要である。以下の点に留意すること。

- 通常の診療時間外で、救急治療をどのように扱うか方針を定めておく必要がある。飼い主に対しては、病院のスタッフに連絡するか、または救急医療体制が整っている近くの別の病院に連絡することによって、飼い猫の救急医療を受けるための方法を明確に指示しなければならない。このような情報は、飼い主から病院に電話がかかってきたときに流す録音メッセージや診療時間外の電話応答担当者を通して伝えてもよい。あらかじめ飼い主、緊急医療を受け

るためにはどうすれば良いかを知らせておくこと。

- 病院が診療業務を行っていない夜間や休診日に入院している猫については、対応できるスタッフ数および猫の様子を観察する頻度を明確に飼い主に知らせておくこと。多くの場合、診療時間外に入院中の猫を継続的にモニタリングすることは不可能であると思われるが、飼い主には必ず、提供できる医療およびモニタリングのレベルに関する情報を提供しなければならない。これらの情報については、病院が提供する他のサービスの概要も併せて記載したパンフレ



全ての病院が、入院猫に24時間継続的にあるいは24時間救急医療を行える、というわけではないということ、またクライアントは提供される治療レベルと緊急時に行われる措置について十分理解しておくことが肝要です。

ットのような形で提供することが理想的である。

いかにキャット・フレンドリーかを調査するか

猫に対するアプローチ方法を変えることで、病院内に大きな変化をもたらすことができ、すぐに現れるものもある。重要なことはすべてにおいて、飼い主の立場に立ったものであるかを常に意識しておく必要がある。その為には、飼い主からの情報やフィードバックを求めることが重要であり、主に以下の2つの方法が挙げられる。

- 第一に、飼い主に、病院で体験したあらゆる経験（肯定的および否定的な意見の両方）を病院にフィードバックする機会があることは極めて重要である。病院の方から飼い主にフィードバックを促し、病院でカードに記入して貰う、またウェブサイトにもメッセージを投稿して貰うのも良いだろう。尚、フィードバックを記名か匿名で行うかは、飼い主の選択に任せること。

- 第二に、「覆面調査員」を通じてフィードバックを求めることが可能である。実際に、外部機関に依頼するほか、猫を飼っている人物に連絡し来院してもらうという方法がある。（院内スタッフの誰とも面識がない人物である必要がある）。来院

後、提供されたサービスの質や、病院がいかにキャット・フレンドリーであったかという事柄についてフィードバックをもらう。これにより、他の方法では得ることが非常に難しい飼い主の視点に立った貴重な意見を得ることが可能となる。

スタッフの臨床技能、トレーニングおよび能力開発

継続的専門教育

より良い医療を提供するためには、最新の知識を取り入れるだけではなく、臨床現場で効果的に応用し、実践しなければならない。現時点での「最適な治療」が何であるかを理解した上で、診療手順および治療方法を更新する必要がある。

現時点での望ましい診療水準を病院内で維持するため、臨床スタッフ（獣医師およびテクニシャン／動物看護師）が、それぞれ該当する継続的専門教育（Continuing Professional Development：CPD）を行うことが重要である。CPDは、以下のような様々な形で実践することができる。

- 学会出席。
- セミナー出席。
- ウェブの会員登録。
- 通信教育コース。
- 雑誌／論文／学術記事等の閲覧による個人学習。



また、以下のことが推奨される。

- 獣医師は、1年間に計35時間以上のCPDを実施すること。このうち、個人学習（雑誌、本の閲覧等）時間も、10時間までは含めることができる。
- 動物看護師／テクニシャンは1年間に15時間以上のCPDを実施すること。このうち、個人学習時間の上限を5時間とする。
- 獣医師および動物看護師／テクニシャンのいずれにおいても、実施するCPDの多くは猫に関連しなければならない。猫に関するCPDに費やす時間の比率は、猫に携わる作業を行っている臨床時間の比率にほぼ一致している必要がある。

院内のスタッフ全員が実施したCPDの記録は、会議への出席であるか、オンラインまたはeラーニ

ングであるか、もしくは自己学習であるかに関わらず、すべて文書で保管し管理する。

院内図書および参考資料の利用

獣医師およびテクニシャン／動物看護師の両者が関連する最新の参考資料をいつでも利用できるようにすることが重要である。参考資料としては、以下のようなものが挙げられる。

- 小動物および猫に特化した最新の教科書。
- 小動物および猫に特化した最新の専門雑誌類。

国際猫医学会（ISFM）では、*Journal of Feline Medicine and Surgery*（JFMS：全会員に無料で配布）を含め、獣医師の診療に役立つ幅広い資料を提供している。病院内の少なくとも1名の獣医師がISFMの会員であること、または病院がISFMの「病院会員」であることが適切である。



診断の基準

より良い医療を提供するためには、最新の知識を取り入れるだけでなく、臨床現場で効果的に応用し、実践しなければならない。現時点での「最適な治療」が何であるかを理解した上で、診療手順および治療方針を更新する必要がある。

重要なことは改善すべき点を特定するため、臨床転帰の評価だけでなく、臨床全体についてモニタリングを行うべきだろう。適切な診療を行うためには、一種の診療監査を日常業務の一環として実施する必要がある。

獣医師および動物看護師／テクニシャンが診療内容を再検討し、臨床転帰について検討する場を定期的に設け、注意を要する部分を明確にし、共有する必要がある。このような話し合いは、定期的な院内会議という形で行ってもよいが、その際必ず「罹患率および死亡率」に関する検討も含めるべきである。予期せぬ合併症を発症した症例や、死亡した症例を再検討し今後同様の問題が生じることがないように、改善するべきところを討論すること。

スタッフ数が少ない病院では、院外の専門家と共に臨床の手順、処置および症例について検討する機会を設けるべきである。また、どのような病院においても、ISFMのフォーラム等を通して専門家から学ぶことも勧められる。

キャット・フレンドリー・クリニックの創り方—その構造と設備

動物病院の一般的な基準

いかなる動物病院も、来院時の利便性や病院建物の一般的な基準に配慮しなければならない。病院の一般原則として、来院が容易である必要がある。特に猫に関しては、過度の騒音を避けなければならない。適切な維持、管理を行うとともに、以下の点に留意すること。

- きちんと整理し、臨床に適切な清潔さを保つ。
- 不快なニオイを除去し、適切な換気を行う。猫はニオイに極めて敏感な動物であるため、他の動物のニオイを最小限に抑える。消毒剤や消臭剤の強いニオイにも注意する必要がある。
- 病院全体に適切な照明を設置する。
- 猫が逃げ出すことがないように、安全対策を講じる。

待合室 — 病院の入り口

猫と飼い主の来院時に、第一印象および最後に残る印象を決定づけるのは、待合室とスタッフである。適切に設計された待合室にキャット・フレンドリーなスタッフがいることで、猫にとってストレスの少なく、また飼い主にとっても、好ましい環境を提供することができる。

待合室には、十分な広さと来院数に対応できるだけの十分な座

席数が必要であり、清潔で、尚且つ過度の騒音やニオイがあつてはならない。

全般的な目的は、以下のとおりである。

- 待合室に入るまでに猫が怯えることのないよう、静かで穏やかな環境を作る。
- 飼い主も猫も大切にスタッフがいる病院であると安心できるような雰囲気を作ることにつながる。

猫は病院に入ると、その新しい環境が自身にとって安全であるかどうかを見極めようとする。待合室は、猫が視覚、聴覚、嗅覚等で感じる危険や恐怖を最小限に抑えるように設計しなければ



ばならない。猫専門病院でなくとも、来院した犬と猫を完全に分けることが理想であるが、病院の構造上難しい場合であっても、工夫することにより、猫のためにできることは多い。以下のような簡単なことでも効果が得られる。

- 完全に隔離された猫専用の待合室を作る。これが理想的であるが、より設計を工夫することが重要である（以下を参照のこと）。
- 猫専用の待合室を設けることができない場合は、物理的に待合室内を隔て、犬専用および猫専用の2つの区画に分けることを検討する。この際、犬と猫が互いに視界に入らないよう適切な仕切りや壁を利用する。また、吠える犬や賑やかな犬が待合室



にいることのないよう対策を講じること（例えば、賑やかな犬は外で待ってもらおう等）。

- 何らかの方法で犬と猫を分けるだけでなく、位置や大きさ、ならびに猫を出入りさせる動線についても、考慮する必要がある。猫の待合室では、人や動物の行き来を最小限に抑える必要がある。診察室に入るときに、賑やかな区域や犬のすぐそばを通過しなければならないようであれば、猫専用区画はその価値が半減してしまう。猫専用の待合室から直接診察室に入るための独立した入り口を設けている病院もある。このような病院では、犬と鉢合わせるリスクが伴うことなく、猫を診察室に誘導することが可能である。
- 待合室を仕切ることができない場合、犬と猫の別々の診療時間を設ける方法がある。こうすることで、犬または猫のどちらか一方のみが待合室を使用することができる。しかし、猫が待合室にいるときに、犬が退院／来院する場合もあるため、犬と猫の直接的な接触を避けるよう工夫する必要がある。

この他、猫の待合室に関して考慮すべき重要な点は、以下のとおりである。

- 受付をするときに、犬と猫が接触する可能性があるため、なるべく狭い場所に受付カウンターを配置しないこと。受付カウンターは幅の広いものにし、その前に広いスペースを確保することで、犬と猫の接触を最小限に留めること

ができる。また、床にキャリーケースを直接置くことで襲われるかもしれないという危険感を感じるため、受付カウンターを低くするか、または受付カウンターの前に猫のキャリーケースを置ける棚（犬の頭より高い位置）を設置すると良いだろう。

- 診察室の音が、待合室に聞こえにくくように工夫する。
- 犬が猫のキャリーケースに近づかないよう院内に案内する。



また、待合室では犬の飼い主に猫に配慮するようお願いすることも付け加える。

- 飼い主と猫を、待合室で長時間待たせることがないよう、速やかに診察室に案内できるように努める。

- 病院によっては、来院後すぐに猫を診察室に連れて入れるようスペースが確保されており、飼い主は待合室に座って待つ必要がないこともある。猫が待合室でストレスを感じないように、キャリーケースに毛布やバスタオルなどを被せることも1つの方法である。

- 他の猫が視界に入ることも、脅威となり強いストレスを感じてしまう。猫の待合室が狭い場合、混み合う時間帯には猫同士の距離が近くなりすぎる恐れがある。これに対処するための方法を、以下に示す。

- 待合室内で猫を隔てるため、座席間に小さなついたてを立てる。

- 猫のキャリーケースを覆うための清潔な毛布またはバスタオルを貸与する。また飼い主にも、できるだけ使用する毛布やバスタオルを持参するように勧める。

- 猫は、床に置かれると不安を感じるため、キャリーケース

を置くための棚や台、または椅子などを設置することが重要である。このような台は、床面から約1.2 mの高さが理想であり、猫同士が向かい合うことがないよう、ついたてやカバーを用いる必要がある。

- 飼い主が待っている間や支払いをしている間などにキャリーケースを置いておける場所を、待合室内に設ける方法もある。



各病院は、それぞれの状況において、現実的且つ有効な措置を講じる必要がありますが、キャット・フレンドリーな待合室を設計する際に、猫のニーズを考慮し、猫に適した最善の方法を綿密に計画することです。

それぞれの病院の状況に合わせて、現実的で実施可能なのかを検討する必要があります。キャット・フレンドリーな待合室をつくる鍵となるのは、猫のニーズを考慮し、

満たすための最善な方法を入念に計画することである。

待合室の設計や種々の工夫に加え、飼い主を安心させるために役立つ方法として、以下のことが挙げられる。

- 受付および動物看護師士／テクニシャンは猫の気持ちを理解し、飼い主全般、行動学的な問題、寄生虫対策、ノミの駆除、避妊・去勢といった猫に関する話題について基本的なアドバイスができるだけでなく、地域の問い合わせ窓口を含む猫に関する情報を提供できる必要がある。尚、優良なペットホテルの

選び方に関する情報は、
i Cat Careのウェブサイト
(<http://www.icatcare.org/>)
で閲覧できる。

- 待合室に、猫専門の学術団体（例えばISFM）の会員であることの証明書、および猫に関連する資格の認定書またはスタッフが実施している継続教育の記録を掲示する。また、病院内のスタッフに関する情報も掲示し、誰が「猫専門従事者」であるかを明示する。
- 猫の品種のポスターや受診した猫の写真、院内の詳細、キャンペーン情報、ならびに猫に関する講演会等のお知らせを掲示する。
- 飼い主が読めるように猫に関する雑誌や書籍などを置いておく。このとき、来院時や帰宅時の猫の移動方法や投薬方法に関する情報を含まれていると良いだろう。

診察室

診察室は、落ち着いて的確に診察できるというだけでなく、可能な限り怯えさせないような工夫をする。

少なくとも1室以上の猫専用の診察室を設けるべきである。猫の来院数に対応できるだけ診察室数があればより良いだろう。診察室の諸条件は、以下のとおりである。

- 清潔かつ衛生的であり、適切な照明および換気が備わっている；



- 獣医師、飼い主、猫、および動物看護師/テクニシャンが窮屈に感じないように、十分なスペースがある。
- プライバシー（猫が逃げ出すことを防止）のため、完全に閉鎖できる部屋とする。特に神経質な猫の診察を行う場合には、ドアに鍵を取っけ入室できないようにすることが望ましい。
- 床および診察台は、清掃、消毒ができる素材を用いる。ステンレス製の診察台は、冷たく、音が大きく、反射する上に滑りやすいため、そのままの使用は避けるべきである。ステンレ

ス製診察台の表面にゴムマットを敷くことで、これらの問題点のいくつかは解消できる。場合によっては、診察台を加温することで、猫のストレスを軽減できることがある。

この他、以下の点にも留意が必要である。

- 窓がある場合は、猫が逃げ出すことを防止する安全策を講じることが必要不可欠である。例えば、猫が逃げ出せない程度にしか開かないようにしたり、窓の外に格子を取り付けるなどの工夫をする。
- 眼および皮膚の検査を行うため、病院内に、完全暗室となる診察室が必要である。
- 猫に触れた手や、診察台等の表面を消毒できるよう、手洗いおよび消毒の設備を設置する。
- 診察台をきれいに拭き、換気をよくして、前に診察した猫が残した「警告的なニオイ」を除去する。
- 壊れやすい物や危険な物は、戸棚の中に収納する。興奮した猫は、棚や診察台の上など、診察室内を走り回ることがあり、注意しないと器物の破損だけでなく、猫が負傷する恐れがある。
- 診察室は、猫が入りやすく、またそこから猫を出すことが難



しいような小さな穴や隙間がないように設計する。

- 入手可能であれば、よりリラックスできる環境をつくるために合成猫フェイシャルフェロモンのスプレーおよび拡散器（フェリウェイ®、ビルバックジャパン株式会社）を使用することが効果的な場合がある。ただし、合成フェイシャルフェロモン製剤をどれほど使用しても、猫を優しく扱う技術に代わるものではない。必要量以上のフェロモン製剤を使用しても、必ずしも効果が高まるわけではないため、使用説明書に従うこと。

診察室に必要な設備

診察室に備えておくべき機器類は、以下のとおりである。

- 猫の体に適切な聴診器（例えば、膜面の径が小さい小児用または猫専用の聴診器）。

- 猫の体に適切なスペキュラを装着した耳鏡 — 別の猫へ使用する際は、スペキュラを適切に洗淨・消毒・滅菌すること。
- 検眼鏡。
- ペンライトおよび拡大鏡。
- 静音バリカン。
- 体温計 — 猫には、柔らかく、先端が曲がるタイプで、検温時間の短い体温計が理想的である。別の猫へ使用する際は、洗淨、消毒し、潤滑剤を塗布すること。
- 非観血式血圧計（無麻酔下の猫でも、より信頼性の高い測定値が得られるドップラー式が望ましい）。
- レントゲン写真を表示する手段（シャーカステンまたはデジタルレントゲン写真のモニター）。

- 猫の体重測定に適したデジタル体重計。どの猫に対しても、診察のたびに必ず体重を測定すること。特に鎮静剤または麻酔薬の投与前には、正確に体重を測定することが非常に重要である。

カルテ

すべての患者において、カルテを適切に保管する必要がある。関連する臨床情報のすべてを詳細に記した記録を、書面または電子形式により永久に保管すること。また、このようなカルテは、スタッフがいつでも閲覧できるようにしておくこと。



診察の手順

診察中は、猫に可能な限りストレスを与えないように配慮しながら、徹底した問診および身体検査を行う。そして次にどのような処置または検査が必要であるかを、必ず飼い主とともに検討する。

AAFP/ISFMの「キャット・フレンドリーな猫の扱い方ガイドライン」“Feline Friendly Handling Guidelines”を参考にし、常にキャット・フレンドリーな扱い方を実践する。診察室という慣れない環境に順応させるための十分な時間を与えることが必要である。少なくとも10分間は問診を行い、可能な限り十分な時間問診を行い、多くの場合診察の質が大きく向上する。

問診

標準化された問診票を用いて、できる限りの既往歴を明確にすること。問診票を使用することで、すべての猫において標準化されたデータが得られることは非常に有益である。

- 既往歴や健康状態だけでなく、(行動学的な問題の有無、運動性、実施している予防医療および一般状態)に関する問診票を飼い主に渡し、病院に猫を連れて来る前または診察前に待合室で待っている時間を利用して、できる限り記入してもらおうとよい。詳細な問診票の記入には動物看護師やス



タッフによる補助が必要となることもあるが、診察前にこのような情報を収集することで、診察を効率化できるだけ、あらゆる関連情報の整理に役立つ。

- 既往歴には栄養学的な評価も含め、食事、ライフスタイル、食習慣などを評価して、改善すべき点の有無を検討する。
- 猫の健康状態の全体像を把握するためには、その猫の行動、飼育環境および環境の変化の有無を見落とさないことが必要不可欠であり、潜在的な問題を早期に発見することができる。また、多くの医学的問題と行動学的問題は相互に関連していることも念頭に置くことが重要である。(例えば、肥満や関節炎、特発性膀胱炎、不適切な場所での排泄など)。
- 高齢期(7歳以上)に達すると、変形性関節炎を発症するリス

クが高い。変形性関節炎の徴候は非常に軽微であるため、来院時は症状が顕著でなくとも、飼い主が気付くことが多い。このため、高齢の猫では、運動性に関するチェックリストまたは質問票を準備することが重要である。

- 緊急な場合を除き、目に見える臨床的な問題だけでなく、全体像を把握することをおろそかにしてはならない。

身体検査

診察室では穏やかに且つ猫の気持ちへの配慮が必要不可欠である。環境を整え、キャット・フレンドリーに接しても強い不安感を示す猫もいるため、最初の診察では完全な身体検査を行えない場合がある。臨床症状に応じて、時間をかけて検査を行ったり、後日改めて

来院してもらう、または猫を入院させることも必要に応じて検討する。診察室にいるスタッフの猫に対する姿勢と対応が、飼い主が再び来院するかどうかを決定づけていることを忘れてはならない。問診と同様に、標準化された身体検査項目（歯科検査や神経学的検査などの特殊な検査のための検査項目）を確認することが非常に大切である。

身体検査におけるコツを、以下に示す。

- 決して慌てないこと。少し時間をかけることで、より大きな成果が得られることも多く。「急がば回れ」である。
- 常に、猫が自分でキャリーケースから出てくるように試みる。診察室の出入口が閉まっ



ていることを確認してから、キャリーケースを開けて診察台または床の上に静かに置き、可能であれば飼い主に問診している間に猫が自分から出てくるよう試みる。

- 常に柔軟に対応し、猫を自由にさせること。このとき、どうすれば猫がよりリラックスできるのかを見極めることであり、個々の猫に適した場所／体位／方法で身体検査を実施する必要がある。飼い主の膝の上



診察室においては、忍耐、穏やかさ、そして共感を示すことが欠かせません。

が落ち着く猫もいれば、床の上を好む猫もいる。また、窓の外を見るのが好きな猫もいれば、キャリーケースに座ったままであることを好む猫も多く、

毛布の下に隠れてしまうこともある。それぞれの猫の好みに合わせるように努め、穏やかな態度でゆっくり時

間をかけて身体検査を行う。猫が嫌がっていないかどうか細心の注意を払い、優しく話かけながら、なでている間に検査を行って



いることを悟られないように、身体検査を終えられるよう心がける。

- 猫と一緒に床の上に座ることで、扱いやすくなる場合がある。これは、神経学的検査等を行う際にも同様である。

- 猫により、横臥位を好む場合と立位を好む場合がある。可能な限り、猫が好む体位で検査を行うように心がけること。

- キャット・フレンドリー
の概念を常に意識し、保定は常に必要最小限に留めること。いかなる方法であっても強い保定は、強い警戒心を抱かせてしまう。

- 状況に応じて、身体検査を数回に分けて行い、その間に猫が自由に体位を変えたり、周囲を見回したりできるようにすると良いこともある。猫に落ち着きがなくなったらすぐに検査を中断し、短時間でも撫でたり、室内や診察台の上を自由に歩かせたり休ませると良い。

- 猫と直接視線を合わせることを極力避ける。検査をスムーズに進めるためには、施術者の方を向いていない状態で、可能な限り多くの検査を行うと良いだろう。視線を合わせることを避けることで猫が怯えること減らすことができる。直接、眼を見る必要がある場合は、ゆっくりまばたきしながら、



ら、穏やかな視線を投げかけると効果的である。

- 大きな音や突然の音（電話の音や高いハイヒールなどの靴音などを含む）および明る過ぎる照明は、検査で必要な場合を除き避けること。また、自身が発する音にも注意が必要となる。例えば、「しーっ」という声は、猫にとっては「シャー!」という威嚇の声のように聞こえるため、このような音を出してはならない。また、穏やかに、ゆっくり、静かな安心させる声で話しかけるよう心がけ、突発的な動作は避けること。

- 老齢の猫では、変形性関節炎に罹患していることが多く、体

に触れるだけで猫に不快感または疼痛を与える可能性があることに注意する。

- 高血圧症または甲状腺機能亢進症の猫は、不安を感じやすいため、より慎重に接する必要がある。

- 侵襲性の高い検査は、最後に実施すること。体温測定や口を開ける身体検査は、ストレスを与える可能性が高く、検査の最後に行うと良いだろう。

- 猫が噛んだり、引っ掻く可能性があることが事前に分かれば、飼い主に対する注意も必要となる。飼い主に猫を安全に保定してもらうことを決して期待してはならない。また、動物病院にいる間の飼い主の安全は動物病院の責任であることを忘れてはならない。

- どんなに優しくまた忍耐強く接しても猫が怯えてしまいすべての身体検査を行えないことがある。このようなケースは稀であるが、無理な保定（猫をつかんで診察台に押しつけるような）をして乱暴に扱うことは状況をさらに悪化させ、猫に大きなストレスを与えることになる。薬剤を用いることは必ずしも推奨されないが、必要に応じて鎮静下で、可能な限り多くの情報を得る（必要に応じてサンプル採取）。

- 必ず飼い主に、検査中に何をしているのか、また正常であるか否かを含め検査結果を伝え十分理解して貰うこと。飼い主の理解を得た上で、治療を開始するようにする。

猫の体重測定

小児用または猫用の正確なデジタル体重計を、いつでも使える状態にしておくこと。このような体重計をすべての診察室に設置することが望ましい。猫をキャリーケースに入れたまま体重測定が行える体重計の方が、汎用性が高い。猫をキャリーに入れたまま重量を測定し、猫を他の場所に移動させた後にキャリーケースのみの重量を測定することで、猫の体重を算出する。すべての猫が同じ体重であると仮定するのは大きな間違いである。成猫の平均体重は、通常3～6 kgの間と幅が広い上に例外もある。特に若齢猫および老齢猫では、これらの平均を大幅に下回ることがある。

体重減少または食欲低下を伴う疾患を患っている猫、もしくは減量のために食事制限を受けている猫については、定期的な体重測定を行う必要がある。

入院中の猫は、原則毎日体重を測定すること。特に、鎮静剤および麻酔薬等の薬剤を投与する前には、必ず正確な体重を測定しなければならない。

健康な若齢ないし壮年期の猫は、少なくとも1年に1～2回、来院の度に体重測定を行うこと。来院ごとに体重の変化率を計算し、その動向に注意する。体重3.3 kgの猫で0.3 kgの減少は飼い主にとって大きな変化ではないように捉えられてしまうが、実際には10%の体



重減少と説明すれば、飼い主は自分の体重と比較することができ、理解しやすいだろう。12歳以上の老齢の猫は、少なくとも6カ月に1回、体重を測定すること。

入院中の猫

猫を入院させる目的は、病気の回復を促すために安全、清潔、かつ静かな環境で猫を管理することである。猫や猫を扱うスタッフのストレスを最小限に抑える必要がある。

入院中の猫は、襲われるかもしれないという危険感からストレ

スを感じており、しばしばケージ内の猫用トイレの中や敷物の下に隠れてしまうことがある。

入院時の注意点

入院前に、可能な限り多くの情報を集めておくことが大切であり、以下に示す情報は、極めて重要である。

- 普段与えている食事の種類、量および給与回数。
- 普段使用しているトイレや猫砂のタイプ。
- グルーミングや、なでられること、遊んでもらうことが好きかどうか。グルーミングを行っているのであれば、使用する用具やグルーミングの頻度。

- 行動に関するその他の情報。

猫を入院させる際には、以下の点にも配慮する。

- 「いつものニオイ」がする安心できる環境をつくるのが、猫の福祉において重要である。飼い主に、家のニオイがするもの（例えば衣類や普段猫が使用している毛布、敷物など）を持参してもらうように促す。場合によっては返却できない可能性があることを必ず事前に説明する。家のニオイがするものを持参してもらうこ

入院猫は不安やストレスを強く感じており、トイレの中や寝具の下に隠れることがしばしば見受けられます。

とで、猫が安心感を得られやすいことを飼い主に十分理解してもらうことが大切である。

- 入院が決まった猫を、人目にさらされる場所や人の出入りの多い場所の床の上、犬の近く、または他の猫と向かい合わせた状態で待たせておかないこと。
- 猫をすぐに入院室に移動させられない場合は、キャリーを布で覆い、静かで安全且つ床から高くなっている場所に置いておくこと。



猫の入院室の設計

完璧なキャット・フrendリー・クリニックになるためには、猫専用の入院室を設けることが不可欠である。これによって、入院中の猫のストレスレベルを下げる事ができ、より快適な環境を提供することができる。さらに猫専用の入院室をより良いものにするには、ケージの大きさや入院室の位置、広さおよびレイアウトも非常に重要となる。

可能であれば、猫を入院室から出さなくても毎日の体重測定が行えるようデジタル体重計が置ける十分な広さを確保すべきである。

猫専用の入院室

吠える犬の上や隣では、猫はゆっくり休むことができない。犬と猫は完全に隔離させることが望ましい。したがって、猫と犬の入院室は厚い壁で物理的に隔離されているべきであり、安全

と安心のために完全に閉鎖できる必要がある。

入院室は、静かで落ち着いており、洗濯機など音のするものから離れた所に位置しなければならない。また、猫にとって適切な照明、換気および温度管理を行う必要がある。

小規模な病院で、どうしても犬と猫を同室で入院させなければならない場合は、合成犬鎮静フェロモン (DAP®、ビルバック株式会社) を使用すると良い。これは、入院犬の興奮を鎮めることに役立ち、二次的に、猫に対して有益な効果が得られる。また可能であれば、手術および検査のために入院させる場合、同じ日時に犬と猫を混同してスケジュールを組まないようにする。

猫の入院室には、可能な限り犬や他の猫の声、機器または金属製の器具がぶつかる音が聞こえないようにすること。院内に、

攻撃的または気性の荒い猫がいる場合は、その猫の声が他の猫に聞こえないよう別の場所に移すことが理想的である。同様に、処置を行う際には他の猫から見えない場





ラス板を使用するか、またはガラス壁を採用することで、入院室に入ることなく容易に猫を観察できる。

入院室の広さ、温度および換気

入院室内のケージ数にかかわらず、部屋の広さは重要なポイントである。

猫をケー

所で行い、「シャー！」と言う威嚇の声や悲痛な声が他の猫に聞こえないようにする。

入院室の位置および猫の観察の仕方

入院室は、入室が容易で尚且つ猫をそこに連れて行くまでに人の出入りの多い騒々しい場所を通る必要がない所に設けるべきである。一方で、猫を頻回に観察できる程度に、他のエリアに十分近い必要がある。猫はステンレス製のシンク、電話およびその他の大きな音がするものや、人の出入りが多い場所から可能な限り離れた場所に入院させるようにする。臆病な猫、怯えている猫または重篤な猫は、通常より静かな環境が必要であるが、容易に観察が行えなければならない。ドアや仕切りにガ

ジから出し入れする際に、他の猫の真正面で猫をおさえずに済む程度の、十分な広さが必要である。入院室が処置室の隣にない場合は、猫の検査を行う台を置くためのスペースも確保する必要がある。この場合も、入院している他の猫の真正面には置かないようにしなければならない。

また、スタッフが作業したり他の猫の様子を見る場合に、神経質な猫のケージのすぐ傍で行う必要がない程度のスペースは必要である。

入院室内の温度が、約18～23℃に維持されるよう温度管理を行うこと。適切な換気も重要であり、湿度は約35%に保つ必要がある。

入院ケージのデザインおよび大きさ

入院室には、通常の入院数に十分な数および大きさのケージを置く必要がある。清掃および消毒が容易に行える固い不浸透性の材料が使用されており、猫が脱走しにくい構造である必要がある。また、床面が固いものを採用しなければならない。

- ステンレス鋼製のケージが最も多く用いられるが、猫の体温を奪い、大きな音が出る、猫によっては反射がストレスとなることがある、といった欠点がある。白いグラスファイバー製のケージは、猫にとってより快適であり、より静かで温かく、退院後の清掃も簡単である。
- ケージの前面は、清掃が容易で観察しやすく、脱走または外傷を予防できるものでなければならない。強化ガラスの扉は、中が非常によく見え、空気感染の蔓延のリスクを低減することができる。また、猫が格子の間に前足をを入れてドアを開けたり、自傷したりする可能性も低くなる。
- 前面が格子のケージを使用する場合は、格子の間隔を検討すること。狭すぎると中が見えにくい、大き

すぎると子猫の頭が挟まる恐れがある。格子のサイズが異なるケージを用意する必要があるかもしれない。

- 金属製ケージの扉にゴムやプラスチックのストッパーが付いているものは、扉を閉める音を小さくする効果が非常に高い。

ケージの位置およびレイアウト。

- 猫同士が直接視線を合わせたり、エアロゾルによる空気感染のリスクを避けるようケージを配置すること。理想としては、ケージが隣接または向かい合わせにならないようにするべきである。（例えば、90°の角度で配置）。
- ケージを向かい合わせ（真向かいまたは角度をつけて）に置く場合は、両ケージ間の最も接近する部分の距離を2 m以上とすることが理想的である。
- スペースが許すのであれば、移動式ケージを導入することで、通常の入院室で受けるストレスが特に強い猫の入院にも柔軟に対応することができる。
- 理想としては、猫がよく見え、容易にケージから出せるように、



またスタッフにとって安全な高さ（床面から約90～100 cm）に設置するべきである。

- ケージを2段以上設置する場合は、最下段のケージが床面から最低でも20 cm以上離れているようにすること。猫は、床面に置かれることを好まない。
- 高過ぎる位置にケージを設置した場合は、観察がしにくくなるだけでなく、猫を出し入れすることが困難になる。ストレスを与えてしまう。またスタッフの安全面でも適切ではなく、清掃を行うことも難しくなる。

ケージの準備、ケージ内の備品

入院中の猫は襲われるかもしれないという危険を感じてストレスを感じていることが多く、しばしばケージ内の猫用トイレの中や敷物の下に隠れてしまう。しかし、入院ケージを少し改善するだけで、より猫に適切な環境を提供できることが多い。

- 猫は高い所に登るのが好きで、ケージ内に設置した棚などの上で横になることを好む。24時間以上の入院が必要な猫には、棚の設置が非常に有用である。最初から棚が組み込まれたケージもあり、このようなケージが長期入院の猫に最適である。使い捨ての段ボール箱を逆さにして置くだけでも、その内部や上に猫が座ることができる。また、ケージが十分に大きい場合は、その猫のキャリーケースを（扉を開けるか、取り外す）ケージ内に入れておけば、猫がその中で丸くなったり、上に座ったりすることもできる。

- 入院室には、長期入院用および短期入院用の、異なる大きさのケージを置いても良い。日帰り入院の猫には、小型のケージが使用できるが、少なくとも猫用トイレ、敷物、食事と水の容器を置くための十分なスペースが必要である。日帰り入院の猫の多くは、避妊・去勢手術または歯科処置などの簡単な処置のために入院しており、長時間ケージ内で過ごす訳ではないが、安全に麻酔から回復させるため、首を伸ばした状態で全身を伸ばせるだけの十分な広さが必要である。24時間以上の入院を要する猫には、ある程度自由に動けるように、これより広いスペースが必要である。I Cat Careが提案する猫用ケージの内寸法の最小サイズ



(幅×奥行き×高さcm)は、以下のとおりである:

- 日帰り入院: 60 x 75 x 60;
- 一泊入院: 70 x 75 x 60;
- 24時間以上の入院: 100

x 75 x 60 (最小)。

- 猫が柔らかい場所の上で過ごせるよう、すべての猫に、衛生的で温かく柔らかい触り心地の良い敷物を使用する。タオルや毛布を使用してもよいが水分を吸収するため、汚れたらすぐに取り替えること。古新聞は、適していない!
- 入院すると、多くの猫は隠れたがるため、安心して体の一部を隠すことができる物を入れておくことが効果的である。何箇所か切り取抜いた使い捨ての段ボール箱、市販の半球型や寝袋型のベッドを使用することができる。
- 猫の保定にタオルを使用する場合は、タオルに猫自身のニオイをつけるため、猫と一緒にケージに入れておくことが有益である。
- 飼い主に持参してもらった敷物や衣類を、ケージに入れておくと慣れているニオイがするため、猫が安心して過ごすことができる。
- 適当な大きさの猫用トイレを置けるサイズのケージを使用すること。また、個々の猫の好みに合わせるため、数種類のトイレを用意しておくこと。猫によって

は人目を避けることを好み、このような猫は、カバー付きのトイレまたは逆さにした段ボール箱の中に置いたトイレを好む場合がある。

- 必要に応じ、尿サンプルの採取を容易にするため、非吸収性の猫砂(例えば、Mikki® Cat Litter Granules、Katkor® granules、または清潔な水槽用砂利)を用意しておくこと。
- 猫によっては、体温を維持することが非常に重要であり、そのための設備を備えておく必要がある。ケージに床暖房を設けることが理想的であるが、電気座布団でもよい。ただし、これらを使用する際には動けない猫が熱傷しないように十分注意すること。電子レンジで温めることができる寝袋やバッグも有用であるが、熱傷の原因となるため温めすぎないように注意しなければならない。湯たんぽも使用



できるが、冷えたままにしておくとかえって猫の体温を奪うため、勧められない。

- 食事や水の容器と猫用トイレは、ケージ内のなるべく離れた場所に置くこと。猫用トイレを一角に置き、その対角線上の反対側に食事と水の容器を置くとよい。食事と水も別々に置ければ、より理想的である。

- 24時間以上の入院が必要であり、遊ぶことが好きな猫（特に、若齢猫および子猫）には、ケージ内に使い捨て、または洗浄／消毒が容易なおもちゃを入れておくこと。

- 食べたり飲んだりするときに猫のひげが縁に触れることを避けるため、食事や水の容器は、浅いものを使用すること。また、プラスチック製の容器は、ニオイが残ることがあるため使用しないこと。浅い陶器製の容器が、理想的である。

- 病院内で猫がストレスを受けている場合、タオルまたは毛布でケージの前面の一部または全部を覆うことで、ストレスが

軽減できることがある。ただし、これを行う場合は猫のチェックを適切に行うために別の措置を講じる必要がある。集中的なモニタリングを必要とする猫には、観察がしにくくなるため不適切であることが多い。

入院中の猫は頻回に観察すること。また、入院中の猫に対する夜間や時間外の医療レベルを、可能であれば書面で飼い主に知らせておくこと。

猫の入院室に関するその他の留意事項

- 猫の入院室には、手洗いおよび消毒の設備を設けること。

- 食器を洗浄、消毒する設備を、入院猫エリアに設けること。（ただし必ずしも入院室内でなくともよい）。重要なことは、猫用トイレの洗浄、消毒を行う場所は、これとは別に設けなければならない。

- 食事の保管および調製を行うエリアは、食事／水容器や猫用トイレ等の洗浄、消毒設備と離れた場所に設けること。これは、二次





感染を予防する上で、重要なポイントである。

- 生の食材の調理または準備する場合は、適切に冷蔵保存ができる設備を設け、猫に適した様々な食事を用意しておくこと。
- 病院内での移動用に、個々の猫専用のキャリーケースを用意すること。これは、その猫が入れてきたキャリーケースでも病院のキャリーケースでも良いが、洗浄、消毒を行うまでは、絶対に他の猫に使用してはならない。

入院猫の識別およびモニタリング

- 入院中は、使い捨ての首輪や明確に識別できるケージまたはキャリーケース等を用いて、すべての猫を確実に識別しなければならない。

- すべての入院猫について、時系列に沿って詳細を記録する入院記録を作成すること。この入院記録には、痛みの程度、行動およびストレスの評価も記録する。記録すべき項目の例としては、以下のようなものが挙げられる。

- バイタルサイン（体重を含む）；
- 治療内容
- 食事および水（給与時間、摂取量）
- 排便および排尿（時間、量、質）
- 臨床症状
- 行動および仕草
- 疼痛評価
- ストレス評価
- 静脈内輸液療法等の詳細

獣医師は、各種項目のモニタリング回数および治療を行う時間（投薬量、投与経路）について明確な指示を与えること。

- 複数の治療法の併用が必要な猫については、それぞれ別々の治療チャートが必要な場合がある。
- 入院中の猫は頻回にチェックすること。また、入院中の猫に対する夜間（および時間外）の



医療レベルを、（可能であれば書面で）飼い主に知らせておくこと。

- すべての入院猫について、獣医師による検査を1日1回以上実施し、記録することが望ましい。

入院猫のためのその他の設備

- 入院猫に酸素供給ができる設備を設けること。
- 入院猫を入浴させて乾かし、グルーミングができる設備を設けること。
- 適切な猫用血管カテーテルおよび輸液セットと併せ、種々の輸液製剤（膠質液および晶質液を含む）を用意しておくこと。輸液時には、輸液の流量を調節する必要があり、これには輸液ポンプまたはシリンジポンプを用いることが理想であるが、ビューレットなどの流量調節器を用





いても良い。また、シリンジポンプおよび輸液ポンプは、輸液剤だけでなく薬剤を持続投与することにも使用できる。

- 一般に猫は脱水症状を起こしやすい動物であり、必要な場合は静脈内輸液をためらってはならない。ただし循環器障害または急性腎障害の猫では、過剰輸液を避けるよう注意が必要である。
- 長期入院のため静脈ラインを数日以上確保しておくために

は、伏在静脈または頸静脈に静脈カテーテルを留置しておくが良い。

感染症の管理および隔離施設

感染症は猫で多くみられ、ストレス下においては特に病原体を排出しやすくなる。

- 二次感染のリスクを最低限に抑えるため入院室、ケージ、敷物および機器類の洗浄、清掃および消毒に関する適切な手順を確立すること。

入院猫は頻回に観察するべきであり、夜間（および診察時間外）に施した治療のレベルについて、飼い主に（できれば書面で）報告しなければなりません。

- 猫の入院室は、毎日清掃・消毒すること。ただし、長期入院の猫については、慣れているニオイを残しておくことが好ましく、使用した敷物が汚れていなければ、そのままケージに入れておくと良い。
- 猫のケージは、次の猫を入れる前に、必ず洗浄し消毒すること。このとき、ステンレス製の扉の格子を消毒し忘れないこと。
- 食事および水の容器は、使用の度に洗浄し、消毒すること。
- 機器類（体重計、体温計、耳鏡、診察台等）は、次の患者に使用する前に、完全に洗浄し、消毒すること。
- キャリーケースおよび敷物は、次の患者に使用する前に、必ず洗浄し、消毒すること。
- 消毒剤は、猫の周囲で使用するのに適したもの（フェノール

系消毒剤を除く）を選択すること。

- 感染症の猫または人獣共通感染症に罹患した猫の処置を行うための隔離室を設けること。院内での二次感染を避けるため、隔離室は独立しているべきであり入り口も別に設けることが望ましい。この施設には集中的な看護が必要な猫が入院するため、厳重なモニタリングが行える程度に他の施設と近接させる。中がよく見えるガラス扉の小さな部屋に、1～2個のケージを置くだけで十分である。
- 理想としては、隔離室の室内に洗浄および消毒の設備を設け、機器類および清掃用具を隔離室から持ち出さないようにすべきである。
- 隔離室の出口には適切な消毒剤を入れたフットバスを設置し、



室内では使い捨てのエプロンまたは白衣、手袋、フェイスマスクおよびシューズカバー等の適切な防護服を着用すること。

- 理想としては、隔離室では、陰圧換気システムを使用するべきである。

- 厳格な衛生管理手順を導入し、スタッフ全員がこれに従うこと。

また、入室するスタッフの人数を厳密に制限する。理想としては、1名を隔離室の看護担当者に指名し、隔離猫に十分なケアを行うべきである。

- 専用の隔離施設を設置できない場合は、必要に応じて離れたエリアに可動式のケージを設置してもよい。

入院猫の食事

入院した病気の猫は、疼痛、ストレス、悪心または脱水のために食欲が低下していることが多い。栄養不良は、罹患率および致死率を左右する重要な要因の1つとなる。

- 体重は毎日測定し、少なくとも週に2~3回、ボディコンディションスコアおよび筋肉量を評価すること。

- 可能であれば、その猫が普段家庭で食べているものを最初に使用する。

- 入院中の猫には、栄養価が高く、なおかつ嗜好性も高い食事を与える必要がある。高タンパク質、高脂肪の食事はより嗜好性が高い傾向がある。（例えば、ロイヤルカナン・退院サポートまたはロイヤルカナン・糖コントロール）

人肌程度に温めたウェットタイプのフードも同様である。

- 食物嫌悪が起こることを避けるため、食欲が低下しているすべての

の猫において、全身性疾患の有無、ならびに疼痛、脱水、悪心の有無を評価し、食事を与える前に適切な治療を行うこと。

- 犬の存在、騒音、ニオイなどの環境中のストレス要因を低減する。

- 食事は、猫用ト

イレから離れた場所に置くようにし、可能であれば水の容器からも離して置く。

- 非常に嗜好性の高い食事（例：ロイヤルカナン 退院サポート）を少量手で与え、猫が自ら食べ始めるよう誘導する。その際には食べるよう促しながら、猫のそばで様子を見守る。

- 少量ずつ回数を多くして与え、食事の合間は容器を取り除いておく。

- 2種類の食事から選ばせるか、または後で異なるものを与



入院している猫や病気の猫は、痛み、ストレス、吐き気または脱水症があるため、食欲がない可能性が高く、低栄養状態が病気や死亡の明らかな危険因子となっている可能性があります。



いる猫、および食欲廃絶が3日以上認められている猫については、経腸栄養（経管栄養）を速やかに検討すること。

- 経鼻食道栄養は、短期間の栄養補給に非常に有用である（経鼻食道栄養にはロイヤルカナン高栄養免疫サポートの使用が理想的である）。

しかし、長期間

の栄養補給には経食道チューブまたは胃瘻チューブが有効であり、この場合使用できる食事の選択の幅がより広がる。（例えば、ロイヤルカナン 退院サポートまたはミキサーで攪拌した食事）。

えてみる。3種類以上はかえって負担になってしまうので注意が必要である。

- ドライフードを好む猫もいるため、少量のドライフードも与えてみる。
- 食べるように工夫しても食べてくれない場合は、必要に応じて食欲増進剤（シプロヘプタジンやミルタザピンなど）を試してみる。
- 注射器による食事補助は、食物嫌悪を引き起こすか、または悪化させる可能性があり、誤嚥性肺炎の原因ともなるため避けるべきである。
- 食欲低下が改善しないか、またはカロリー摂取量の低下が3～5日以上持続して





あらゆる猫（子猫や、種々の疾患に罹患した猫を含む）に対して、麻酔の導入および維持を安全に行うための適切な装置を設置すること。適切な麻酔薬および鎮痛剤を用いて麻酔のリスクを最小限にすることが、獣医師の責任である。手術室に適切な機器類は、以下のとおりである。

手術室および麻酔

無菌的手術を行うための専用の手術室を設けること。理想としては、手術のための麻酔導入および剪毛は、別室で行うべきである。理想的な手術室は、以下のとおりである。

- 手術台および床面の清掃および消毒が容易である。
- 手術（必要に応じてX線撮影）に使用する機器のみが置かれている。その他の機器／材料の保管に使用しないこと。
- 手術部位を照らす専用の照明があり、十分に明るいこと。
- 入院室の手洗い設備とは別の手術専用の手洗い消毒設備がある。理想としては、手術室の外に設けるべきである。
- レントゲン写真を表示する機器がある。
- 無菌的手術以外の目的には使用しない。

- 酸素を供給するための装置。
- 蘇生を行うための装置。
- 様々な大きさのカフ付きの食道チューブとカフなしのものを用意しておく。カフなしのチューブは、食道の損傷を防ぐことができが誤嚥性肺炎のリスク（歯科処置の際など）がある。” Red rubber “チューブと比較して、喉頭刺激性が低いためシリコンチューブが推奨される。
- 猫のサイズに合わせた喉頭鏡および挿管前の喉頭麻酔に適切な局所麻酔薬。





- 吸入麻酔薬を使用する場合は、温度補償式気化器。
- 吸入麻酔薬を使用する場合は、適切な麻酔回路が必要である（例えば、T型回路および猫に適したサイズのフェイスマスク）。
- 体温維持のために猫を温められる設備。これには、温風式加温装置（例えば、Bair Huggers®, www.arizant.com）が最適であるが、電子レンジで温めることができるヒートパッド（例えば、Snugglesafe® Microwaveable Heat Pads, www.snugglesafe.co.uk）が、これより安価な代用品として使用できる。また、必要に応じて、輸液剤も適切に加温すること。

猫が麻酔下にあるときは、熟練したスタッフに



無菌的外科処置のために、専用の手術室を確保する必要があります。

よるバイタルサインの嚴重なモニタリングが必要である。また、日常的に麻酔記録を使用すべきである。麻酔記録には、以下を含めること。

- 日付、担当者、処置内容、麻酔時間。
- 猫の個体情報（ID番号、体重）；
- 導入および維持に使用した薬剤および投与量。
- 以下のバイタルサインの定期的な記録。
 - 呼吸数。
 - 心拍数—聴診器、食道聴診器またはECGにより測定。
 - 脈拍の状態および回数。
 - 体温—検温時間の短い曲がるタイプのデジタル体温計が有用である。
 - パルスオキシメトリー（猫に適切なサイズのプローブを使用）。

◦ 血圧（適切な機器および猫用サイズのカフを使用）。オシロメトリック式血圧計は、麻酔下の猫に適しているが、無麻酔下の猫では正確に測定できない。ドップラー式血圧計は、無麻酔下および麻酔下のいずれの猫でも正確であり、使用に適している。カフの幅は、肢囲の約30%とし、大部分の成猫で一般に約2.5 cmである。

◦ 理想としては、カプノグラフィ。

◦ すべての合併症。

麻酔後の回復期には、習熟したスタッフが、猫を適切にモニタリングすること。

手術機器

救急処置に必要なものも含め、病院内で実施するあらゆる手術で使用する手術機器を備えておくこと。

また、使用する前に手術機器を滅菌できるように、適切な滅菌設備を備えておくこと。加えて、滅菌手袋および滅菌手術衣を用意しておき、適切に使用すること。

機器の保守管理を適切に行い、定期的に精度を確認するための品質管理を行うこと。



多くの猫が歯科疾患を患っている。歯科処置を高い水準で行えるよう、適切な歯科用機器を備え、保守管理を行うことが重要である。適切なデンタルケアのため、以下のことを実施すること。

- デンタルケアの重要性を飼い主に説明し理解してもらう。
- 身体検査の一環として、徹底した口腔内検査を行う。
- 無麻酔下での通常検査で異常が認められ、必要であれば全身麻酔下で徹底した歯科検査を行う。
- 歯科レントゲン写真を撮影するための設備を導入する。理想としては、口腔内用のデジタルレントゲン撮影装置。
- 適切な歯科記録をつけること。

歯科ツールに関する注意点

- スケーラー、キュレット、歯周プローブ、エレベーター、ラクスエーター 一式。一例を以下に示す：

- Superslim elevator.
- Couplands #1 elevator.
- Extraction forceps

pattern 76N。

- 器具類は鋭利である必要がある。適切な保守管理を行うこと。
- 歯科用の保護具として、エプロン、マスク、ゴーグルおよび使い捨て手袋を準備すること。
- スケーリングおよび歯の研磨、歯の分割および抜歯を行うための設備を備えておくこと。また、処置中には冷却用水を利用できるようにしておくこと。圧縮空気駆動式歯科ユニットおよび先が球形で

小さい（#1または#2）切削バーを用意することが推奨される。

- 感染症の伝搬を防ぐため、すべての歯科機器は、別の猫に使用する前に適切に洗浄し、消毒・滅菌を行うこと。

画像診断

猫の救急医療の現場では、高品質のX線画像が非常に重要となるため、可能であればこの設備も備えておくといいたいだろう。スタッフへの放射線の不必要な曝露を避けるため、鎮静下や麻酔下の猫のポジショニングを容易にするさまざまな保定具を用意しておくべきだろう。

すべてのレントゲン写真の記録を保管しておくべきであり、レントゲン写真そのものは、不正に開封されない方法で管理しなければならない。

理想としては、超音波検査機を院内に設置する。準備できない場合は、超音波診断が必要な症例では設備が整っている動物病院を紹介する必要がある。

検査設備

適切な臨床検査を実施するため、基本的な検査機器を常に使用できるようにしておくこと。必要な検査設備は、以下のとおりである。

- 臨床用顕微鏡。



- 血液塗抹標本および体液／組織の塗抹標本を作製できる設備。
- ヘマトクリット（PCV）測定、血清／血漿の採取、および尿沈渣分析を行うための遠心分離機。
- 血糖値を測定するための機器。
- 血中尿素窒素（BUNを測定するための機器。
- 尿および血清／血漿の比重を測定するための機器（適切な屈折計）。
- 基本的な尿化学分析を行うための機器（例えば、尿試験紙および分析機）。

機器の保守管理を適切に行い、精度を確認するために定期的に品質管理を実行すること。

より幅広い検査を院内で実施できることが望ましい。院内で実施できない検査項目に関しては、外部の検査機関に委託できるようにする必要がある。院内で臨床検査を行う際の重要なポイントを、以下に示す。

- すべての機器の測定限界を理解しておくこと。
- 機器類が適切に保守管理および校正されていること。
- 品質管理検査を行うこと。
- 正確な検査結果が得られるよう習熟したスタッフが行うこと。

医薬品動物用医薬品・ 医薬品

認可された動物用医薬品であっても入手できるかどうかは、国によって大きく異なる。重要なことは、それぞれの動物病院が、適切な製品をメーカーの指示に従って保管し、それらの薬剤を適切に管理することである。関連する法律を順守する必要があるが場合によっては、猫への使用が明確に認可されていない薬剤を使用しなければならないだろう。常に事前に飼い主のインフォームドコンセントを得ることが大切である。

緊急事態に備えて、獣医療に特化した猫の中毒に関する最新の情報サービスにアクセスすることが推奨される。その例として、国際的にサービスを提供し

ているVeterinary Poisons Information Service (www.vpisuk.co.uk)が挙げられる。

キャット・フレンドリー・クリニックの実現

本ガイドラインで解説したアイデアのほとんどは、高額な費用を必要としない。建物の改装や資材の導入というハード面だけでなく、猫への接し方や姿勢、病院内の組織化のありかたなどソフト面も重要であることがお分かりいただけたと思う。ここまでに挙げたコツを積み重ねる



ことで、大きな変化につながるのである。英国ではすでに、病院がキャット・フレンドリー・クリニックに生まれ変わっている。以下に、どのような変化がもたらされたかについてこれらの病院から寄せられたコメントを記す。

「キャット・フレンドリー・クリニックになったおかげで、当院が猫のために全力を尽くしていることを示すことができ、新規の飼い主が来院してくれるようになりました。」

「当院は、大規模な二次診療施設ですが、院内の全スタッフが、病院をキャット・フレンドリーにすることに関わってくれました。スタッフ全員が、猫を扱うときには常に猫の気持ちを理解しようと心がけています。今でも常に全員が、猫のストレスを減らすために何かできることはないかと模索を続けています。」



「私たちは、猫の飼い主さん専用
駐車場を導入し、待合室も犬と猫に
分け、さらに入院室も犬と猫と分け
ました。キャット・フレンドリー・
クリニックになったことをとても誇
りに思っています。この誇りがある
からこそ、診察室での猫の扱い方
や処置を行うための保定の際など、
病院内のすべての面にキャット・
フレンドリーの原則に従うことが
できています。病院の猫に対する
姿勢を変えてからは、来院する猫た
ちは、以前より明らかにリラックス
しており、病院にいることを楽しん
でさえいるようです。」

「キャット・フレンドリーになる
ということは、猫という動物の医
療と看護において、他の動物とは
異なるニーズがあることを認識し
なければなりません。飼い主と病
院スタッフのどちらの視点から見
ても、病院にとっても良い変化を
与えてくれました。スタッフ全員が
猫のことを考えているので、当院
の医療は、一貫して
高い水準を保っています。また、新しい
診療方針を考案する
中で、たくさんのア
イデアが生まれまし
た。」

「当院は、熱意あふ
れるキャット・
フレンドリー・クリ
ニックとして、我々
の知識や猫特有のニ
ーズへの理解に共感
した飼い主からも良
いフィードバックを

頂いています。入院中の猫は、以前
に比べて穏やかで扱いやすくなり、
回復も早くなっていると実感してい
ま

す。また、昔から来院している猫た
ちも、頻回に血圧を測定できるよう
になり、測定結果も以前に比べては
るかに正確性を増しています。」

「当院がキャット・フレンドリー・
クリニックになったことで、多くの
飼い主と猫たちにとってよかったこ
とだと思えます。何人かの飼い主
は、週1回設定している猫専用の診
察時間に満足してくれています。ま
た猫たちも以前より落ち着いてい
て、飼い主にとっても猫にとっても
来院のストレスがずいぶん軽くなり
ました。完全に隔離した猫専用の入
院室は、照明を少し落とし、フェリ
ウェイ®を使用することで、入院中
の猫のために穏やかな環境を提供し
ています。ケージ内には、隠れる場
所を作り、おもちゃも入れてあげて
います。」

